

## 第4章 生物生息環境再生シナリオの検討と評価

### 4. 1 東京湾

#### 4. 1. 1 生物生息・生育環境改善施策の検討

##### (1) 東京湾の干潟に関する歴史的変遷<sup>2)</sup>

東京湾の海岸地形は、基本的には干潟であり、明治時代後期までは、横浜から東京、千葉、木更津、富津に至る内湾の海岸には、広大な前浜干潟が連続的に広がっていた。また、多摩川、江戸川、養老川、小櫃川などの河口デルタには、ヨシ群落の優占する河口湿地が存在した。

しかし、1950年代までには、横浜、川崎、東京、千葉などの都市部地先の干潟が埋め立てられ、高度経済成長が始まった1960年代後半以降は、干潟の埋め立てが大規模に進み、干潟の90%以上、東京湾の総面積の約20%が消失したとされる(図-4.1.1.1)。

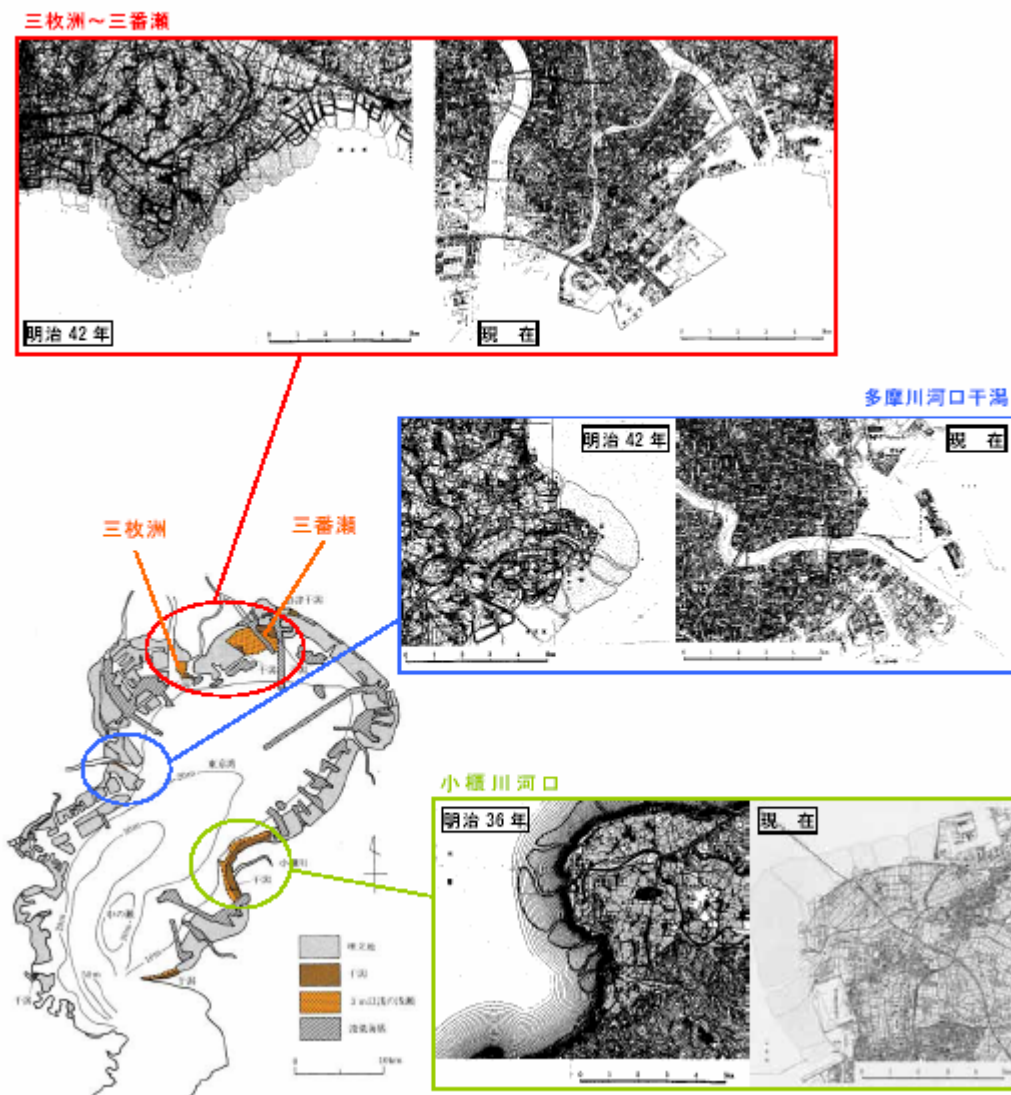


図-4.1.1.1 東京湾の主な干潟に関する明治時代と現在の地形変化<sup>2)</sup>

## (2) 生息・生育環境改善策の基本的考え方

東京湾における干潟の変遷を見ると、明治時代後期までは内湾の海岸に連続的に広がっていた広大な前浜干潟や河口湿地は、1950年代から始まり、高度経済成長期の1960年代後半以降に大規模に進んだ埋め立てにより、干潟の90%以上、東京湾の総面積の約20%が消失したとされる。したがって、東京湾の生息・生育環境改善における根本的な課題として、「干潟・浅場の面積を拡大すること」が重要であると考えられる。

ここでは、下記に示すケースについてシミュレーションを行い、生息・生育環境の改善策を実施した際の効果の検討を行うこととする。

- ① アサリを対象種として、現在の埋立地より沖合側に明治時代の水深を再現したケース
- ② アサリを対象種として、花見川河口部に干潟を造成し、干潟部分の水深を現況の半分、底質をSI=1相当に変更したケース
- ③ アマモを対象種として、東京湾全域で底質をSI=1相当、水中光量を現況の2倍に変更したケース

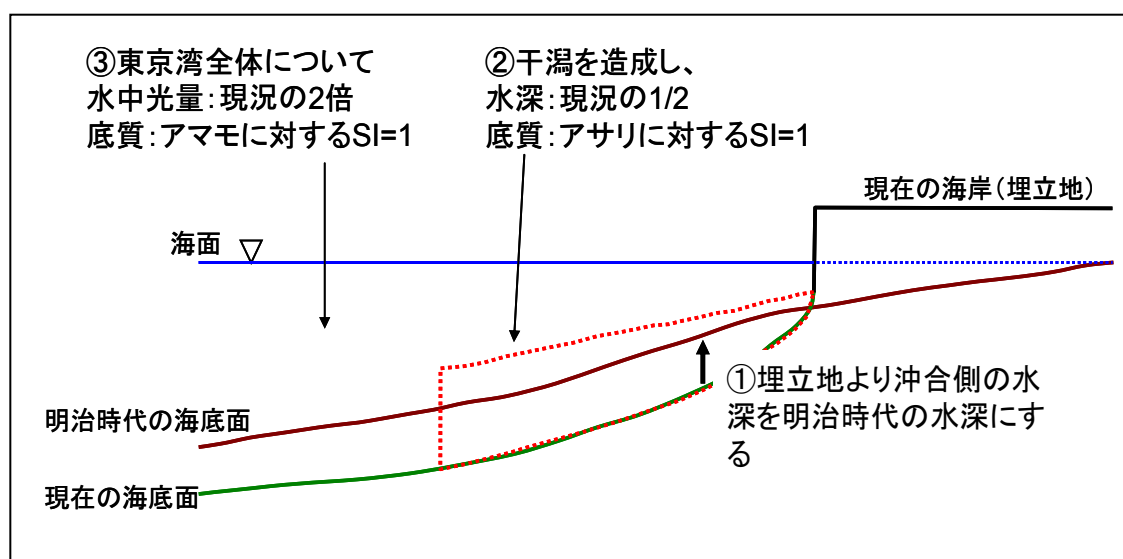


図-4.1.1.2 検討を行った生息・生育環境改善策